

改訂2版の序

— Time flies by —

本書の初版がJDDW2008に発刊されてから早くも3年半が経過した。この間に本書に対して多くの称賛の声をいただき、身に余る光栄であると感じている。ただ本書に書かれている内容はわれわれが初めて開発したり、発見したりしたものではない。ERCPあるいはEUSが開発され、発展してきた中で基本的な、そして最良（と筆者らが考えている）の手技や知識を書き綴ったものである。その心は、偶発症の多いこの領域に少しでもリスクを減らして成功率を高めることを目的に、胆膵内視鏡に携わる読者（医師、看護師、技師）の手助けとなるようなものを創ることであった。胆膵内視鏡の歴史は、昨年好評を博したドラマ“JIN—仁—”の最終回で南方仁医師の言っていた“当たり前のこの世界はだれもが歴史の中で戦い、もがき苦しみ、いのちを賭し、勝ち取ってきた無数の奇跡で編み上げられている”という言葉に集約されているような気がする。いまでは当たり前になっている診断的・治療的ERCPも多くの熟練した内視鏡医によって開発改良され、現在に至っている。それ以上に今日のこうした成功は、多くの患者さんによる協力無くしてはなり得なかったのである。われわれは決してそのことを忘れてはならない。

消化器内視鏡の中でも胆膵内視鏡は最も高度な手技を要すると言われる。少しでもできるようになったからといって調子に乗って“過信”あるいは“慢心”するべきでないし、常に“真摯”な態度で“慎重”に行うべき手技である。ただこうしたことは手技にのみ当てはまることではない。本書は手技を中心にして解説したものであるが、読者、特に内視鏡医はこうした手技についてのみ勉強するのではなく、その手技のメリット、デメリットに関して最新のものを含めた論文を知り、その“エビデンス”に基づいて（あるいはそれらを十分に理解して）手技に臨むことがきわめて大切である。

そのような点からこの第2版では、最近報告されている手技をいくつか追加して解説した。特にWire-guided cannulationは身につけておきたい手技の1つである。ただし、こうした新しい手技も含めて、胆膵内視鏡関連手技は決して“完璧”なものではなく、これからも評価されていく（むしろ評価する立場になって欲しいが）ものであることを次世代の内視鏡医は忘れずにいてほしい。こうした先達者からの“知恵”の伝授とういうこともあり、今回も日本の優れた胆膵内視鏡医からのメッセージをコラムとして多数掲載させて頂いた。ぜひ、彼らの意図する“思い”を感じ取って欲しい。われわれの思いはまさに南方医師の言っていた“だから僕たちはさらなる光をあたえよう、こんどは僕たちのこの手で、未来のために”である。

最後に大変お忙しいなか執筆にご協力いただいた先生方にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

2012年2月

糸井隆夫